

# Fリーグ（共同開催試合）集客事業に参画した 学生の学び分析

原 田 理 人\*<sup>1</sup>      古 田 康 生\*<sup>2</sup>  
小 原 慶 祐\*<sup>3</sup>

- I 序論
- II 調査方法
- III 研究結果
- IV 考察
- V 結論

## I 序論

### 1 研究背景

岐阜協立大学「レジャー・スポーツマネジメント研究会」（以下、研究会とする）は、2019年に設立された。「スポーツマネジメントをテーマにして、「みる」「聞く」「知る」という実体験を通してスポーツマネジメントの世界を探索する。また、仲間づくりとともに奥深いスポーツマネジメントの視点を養う」ことを活動目的としている。

研究会は、2019年9月に一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する一般社団法人日本フットサル連盟が運営する日本フットサルリーグ（以下、Fリーグとする）から、2019年11月8日から10日に名古屋市の武田テバオーシャンアリーナで「共同開催」される全12試合の集客事業の依頼を受けた。

#### (1) 日本トップリーグ機構

Fリーグが加盟している一般社団法人日本トップリーグ連携機構とは、2005年5月に8競技9リーグで発足し、その後は加盟する競技団体が増え、2020年12月現在、球技9競技の日本の最高峰12リーグが加盟している。その目的は「競技力の向上と運営の活性化を目指した活動を行

う機構」である。加盟する競技団体は、一般社団法人日本フットサル連盟のFリーグをはじめ、一般社団法人日本女子サッカーリーグのなでしこリーグ、一般社団法人日本バレーボールリーグ機構のVリーグ、一般社団法人バスケットボール女子日本リーグのWリーグ、日本ハンドボールリーグ機構のJHL、日本ラグビーフットボール協会のジャパンラグビートップリーグ、アジアリーグアイスホッケー実行委員会のアジアリーグ、一般社団法人ホッケージャパンリーグのHJL、日本女子ソフトボールリーグ機構のJSL、一般社団法人日本社会人アメリカンフットボールリーグ協会のXリーグ、公益社団法人日本プロサッカーリーグのJリーグ、公益社団法人ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグのBリーグ、である<sup>1)</sup>。

#### (2) 一般社団法人日本フットサル連盟：フットサルリーグ（Fリーグ）

フットサル (Futsal) とは、主にアリーナなどの室内でプレイし、1チーム5人で編成されたチームで競技するサッカーである。1989年に国際サッカー連盟の所管となり、1994年に統一ルール（世界共通）がまとめられた。そのフットサル競技の日本トップのリーグがFリーグ (F. LEAGUE) である。Fリーグは日本フットサルリーグの愛称で、日本フットサル連盟が運営するフットサルの全国リーグである。

2019年時点で、全国20チームが所属し、ディビジョン1（1部リーグ）は12チーム、ディビジョン2（2部リーグ）は8チームで編成され

\* 1 岐阜協立大学経営学部教授

\* 2 岐阜協立大学経営学部教授

\* 3 岐阜協立大学大学院経営学研究科修士課程

ている。

Fリーグの特徴的なリーグ運営に「セントラル開催」と「共同開催」がある。サッカーのJリーグやプロ野球では通常、ホーム&アウェイ方式にてリーグ戦が運営されている。一方、セントラル開催とは、リーグが主管し、所属する全てのチームが一つの競技場に集結してリーグ戦をする方式である。

(3) 2019/2020のFリーグ第24・25節

Fリーグの2019-2020年シーズンにおける第24節と25節は、名古屋市港区金城ふ頭にある武田テバオーシャンアリーナにて開催され、ディビジョン1（1部）に属する全12チームが集結して「共同開催」された。

2019年11月8日（金曜日）は2試合、11月9日（土曜日）は5試合、11月10日（日曜日）は5試合の計12試合である（表1参照）。

(4) 共同開催での課題

今回依頼された共同開催方式では、ホームタウンとなるのは名古屋オーシャンズのみになる。すなわち、研究会が依頼された集客事業では、名古屋市をホームタウンとしないチーム同士の試合の観戦者の獲得を意味する。また、複数の試合が一箇所で実施されるため、午前の試合も

あれば、午後7時過ぎ開始の試合もある。したがって、研究会の学生には、これらの課題を考慮して集客につながる企画案作成とその運営が求められた。

(5) 企画案の作成

まずは、研究会に所属する9名の学生により、50超の企画の素案が提出された（表2参照）。その後、代表学生を中心に企画案が再構築され、スポーツマネジメントを専門とする教員の指導を受けた後、実現可能な企画案に絞り込まれた。

(6) 実施した企画

今回の集客事業では、最終的に小学生を対象とした「エスコートキッズ」と「サイン会」、「SNSによるリーグ戦告知」等が採用された。「エスコートキッズ」は東海三県のフットサル教室などでプレイする児童を対象に募集し、無料にて招待する方式を採った。これは、引率する保護者と指導者の有料入場者の獲得を目的とした。「サイン会」は色紙などを研究会が準備し、エスコートキッズで参加した児童や、そのきょうだい、保護者、一般来場者を対象に実施した。「SNSによる告知」は、10月以降に実施されるリーグ戦の試合結果と状況を毎日のように配信して来場に繋げる目的で企画された。

表1 Fリーグ2019-2020年シーズン試合日程 第24節と25節（ディビジョン1）

節	月 日	キックオフ	対 戦 カ ー ド	開 催 会 場
24	11月8日（金）	17:00 19:30	立川・府中 vs 浦安 湘南 vs F選抜	武田テバオーシャン アリーナ (名古屋市港区)
24	11月9日（土）	10:30 12:45 15:00 17:15	町田 vs 北海道 大阪 vs 仙台 名古屋 vs 長野 大分 vs すみだ	
25	11月9日（土） 11月10日（日）	19:30 10:00 12:15 14:30 16:45 19:00	湘南 vs 浦安 F選抜 vs 北海道 仙台 vs 立川・府中 名古屋 vs 大分 すみだ vs 町田 長野 vs 大阪	

表2 研究会学生の代表的な企画素案（一部）

- ・学生団体（東海フットサル学生支部、東海学生サッカー連盟）への試合日程の告知
- ・SNSを活用して広く一般への試合日程の告知
- ・試合間のインターバルを活用して、学生のダンスやチアリーディングなどのパフォーマンス
- ・社内でフットサルを実践する企業、フットサル用品の販売企業、スポーツ用品販売企業などを対象に協賛を募りチケットを販売する
- ・チケットの付加価値化（販売価格に応じて付加価値をつける）
- ・観戦者対象のフットサルに関連する体験型イベントを実施する
- ・スタジアム内での出店（物販）
- ・観戦中及び試合終了後にお楽しみ抽選会を実施する
- ・シニアの高齢者を対象とした飲食店の出店
- ・ファミリーや親子を対象とした「アリーナ施設見学」、「サブアリーナでの練習見学」などのツアー
- ・サイン会

## (7) 事業の運営

リーグ戦が開催された3日間では、15名の学生が事業運営を務めた。内訳は、男子学生が7名、女子学生が8名、1年次学生が3名、2年次学生が1名、3年次学生が6名、4年次学生が4名、大学院生が1名であった。

### ①エスコートキッズ事業

第24節・25節の全ての試合は、インターネット配信（AbemaTV）されるため、試合開始の遅延は許されない。そのため、リーグ側のスタッフとの連携や参加児童に対する事前指導、誘導などを担当スタッフ間で繰り返し協議して運営した。なお、全12試合で試合開始の遅延などの事業運営によるトラブルは一切なかった。（写真1参照）

写真1：エスコートキッズ事業の様子



参加児童に諸注意を説明する学生  
（奥が試合会場）

### ②サイン会事業

エスコートキッズ事業に参加した児童を中心に「サイン会」の運営を担った。すなわち、来場者を対象にサイン会実施の告知を行い参加者を募り、試合終了のタイミングを見計らい参加者を集合させ、サイン会場（サブアリーナ）まで誘導する、終了後は再び観戦席まで誘導する、という一連の運営を担った。なお、1試合当たりのサイン会参加者は、おおよそ30名程度であった。これを全12試合にて運営した。（写真2参照）

写真2：サイン会事業の様子



サイン会の会場に誘導し、  
選手前に参加者を整列させる学生

## (8) 集客事業の成果

Fリーグによる2019-2020シーズンの第24節及び第25節での研究会事業による入場者数は600名強となり、一定の成果を得たと考えられる結果であった。

## 2 研究目的

本研究の目的は、上記で説明した研究会とFリーグが連携協定を結び実施された「Fリーグ集客事業」に参画したスポーツマネジメント専攻学生を対象に、参画学生がその経験を通してどのような学びを得たかを検討することである。本報では、特に学生が感じた改善すべき点に焦点を当てて報告する。

## II 研究方法

### 1 調査対象者

岐阜協立大学経営学部スポーツ経営学科に在籍し、レジャー・スポーツマネジメント研究会に所属し、「Fリーグ集客事業」に参画した学生15名（以下、参画学生とする）を調査対象とした。学年別、性別の人数を表3に示した。

表3 学年別の参画学生の数

	1年次	2年次	3年次	4年次	計
男子学生	0	1	2	4	7
女子学生	3	0	3	2	8
計	3	1	5	6	15

単位：人数

### 2 調査期間

Fリーグ2019-2020シーズンの第24節及び25節が終了した直後の2019年11月11日から18日を調査期間とした。

### 3 データ収集方法

研究デザインは、質的記述的調査研究である。参画学生を対象に、活動内容に関する自由記述式調査を行った。調査手順は、まず参画学生に集客事業終了後の調査期間に自由意思に基づいて調査項目の回答を求め、代表学生にソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を用いて提出させた。その後、代表学生が匿名化して調査者に提出した。調査項目は、『今回の集客

事業での「気づき」や「学び」、「疑問」、「意見」を自由に記述してください』とした。

### 4 データの分析方法

調査対象学生より得られた分析対象データである自由記述文の分析方法は、意味のある文章を一つのまとまりとしてコード化（切片化）して、カテゴリ化を行い、サブカテゴリ、カテゴリの順で分類した。データ分析結果の信頼性を確保するため、質的研究の経験を有する複数の研究者が検討を重ね、データを分析した。

### 5 倫理的配慮

研究協力を得た調査対象学生の15名に対して、研究主旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては、個人情報保護を遵守し、個人が特定されない旨を説明した。また、調査協力は自由であり、不参加や途中での中止であっても、不利益は生じない、と説明し同意を得た後に回答させた。なお、本研究は、岐阜協立大学研究推進委員会規則、『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

## III 研究結果

参画学生の「学び」のコード総数は、199であった。記述内容は、全般的な学びの成果では、27件、改善すべき点は、115件、できた点（成果）は57件に大別された。

本研究で分析対象となった改善すべき点（表4）では、サブカテゴリは、14つに分類され、広報活動、企画立案・計画性、参加児童対応、スタッフ間の情報共有、外部との密な連携、情報機器の活用、事前準備、計画的人員配置、アンケート調査、時間管理、試合会場環境の理解、個人の能力、人間関係、リーダーの責任であった。カテゴリは、7つに分類され、事前の活動、参加者対応、情報共有、計画性、試合会場環境、個人的能力、学生組織であった。

それぞれについて以下、カテゴリは【 】、サブカテゴリは〈 〉、参画学生の具体的な記述内容は「 」で示す。

表4 スポーツ事業に参画した学生の学び（改善すべき点）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード（学生の記述）	件数
事前の活動	広報活動	広報戦略としてFリーグの付加価値のアピール不足、広報活動の範囲（東海三県）、子どもに魅力的な付加価値を考える、参加児童の募集計画（タイムスケジュール）	5
	企画立案・計画性	事業計画の精査に不足がある（細部の具体的確認）、企画案ができなかった（許可されない）、納得できていない、空きスペースでの集客企画ができた	6
参加者対応	参加児童対応	子どもへの説明が伝わらない、話が理解できない、参加児童の誘導が上手くできない、意欲的に参加する児童に助けられた、来場者誘導、参加児童への事前連絡不足（上履き）	9
		参加児童の配慮不足：効率的な休憩、サイン会での希望チームの適合、全体視、参加児童の遅れのフォローができなかった	6
情報共有	スタッフ間の情報共有	グループ内で情報共有ができていない（非効率・二度手間）、全体でのコミュニケーション・情報交換、全ての試合に参加できないことで分からない、メンバー間で相互理解できる引継ぎ、変更に応じた意思統一、役割の明確化（曖昧）、役割の伝達・確認に不足がある、全員が全業務内容を把握できていない、全体の共有、変更事項（情報）の共有が周知・理解の確認、確認のタイミングが遅い、連携不足（来場者を待たせる）、スタッフ間で企画趣旨の理解の相違がある、予備知識で心の準備ができた、相互理解と確認・情報の共有の場づくり	24
	外部との密な連携	外部組織（施設）との連携不足、保護者の行動範囲	3
	情報機器の活用	会場でのSNSやメールの活用、トランシーバー、管理シートの検討	4
計画性	事前準備	分かっていない業務は準備不足で慌てる（誘導）、事業と役割に関する知識不足（グッズ販売）、連携の遅れ	4
		必要備品の準備：ボールペンやバインダー	1
	計画的人員配置	業務負担の偏りがある（偏在）、リーダーの責任が過剰、休憩時間に差がある、サポート体制が不足、人員不足・役割分担ができない、参加メンバーの統一化：全日程参加で統一できる、一人二役は可能な役割分担だと円滑に運営できる、人員配置不足	18
	アンケート調査	アンケート調査での特典、調査方法、調査項目	3
試合会場環境	試合会場環境の理解	会場案内が分かりづらい・会場が理解できていない、規定範囲の情報不足、エスコートキッズとサイン会の集合場所、チケット配布、受付場所の配置	6
		テレビカメラの把握（想定外）できていなかった	1
個人的能力	個人の能力	慣れ・見落とし、疲労による怠惰、大きなミスなくできたが、小さなミスはあった、忘れ物	4
		突発的なトラブルに迅速対応ができない、素早い判断、途中での改善要求に対応できなかった	3
		責任の自覚：人任せ（曖昧）、寝坊、頼りすぎた	3
		体調管理（睡眠不足）、疲労で動けない	3
		時間管理・コントロールできない	2
学生組織	人間関係	組織内トラブルの早期解決できない、参加学生によるモチベーションの温度差	2
	リーダーの責任	スタッフの個性の理解：変更事項の理解と納得・行動させる、運営組織のリーダーは難しい	4
			115



表4は、参画学生が事業を通して学んだこととして『改善すべき点』と考えた115件の記述事項をコード化した後に、カテゴリ分類した表である。

### 1【事前の活動】

このカテゴリは、〈広報活動〉と〈企画立案・計画性〉の2つのサブカテゴリにより構成された。これは、エスコートキッズに参加した児童やその保護者らの募集活動の全般とする広報活動と参画学生の企画立案の項目で構成されると解釈できるため【事前の活動】と命名した。

#### (1) 〈広報活動〉

観戦者の集客を目的に広報活動したが、その対象者・児への「Fリーグの付加価値」や「Fリーグの魅力」をアピールするのに十分な予備知識が不足しているという記述が認められた。加えて、広報活動をする地域やそのタイムスケジュールといった「広報戦略が十分に練られていない」という指摘もあった。

#### (2) 〈企画立案・計画性〉

今回の連携事業ではリーグ側の諸事情で学生企画のいくつかが直前になって不成立となった。それに対して、「企画ができなかった」や「空きスペースで集客企画ができた」といった意見もあった。

本事業では学生が主体となって事業計画を練り、タイムスケジュールを管理して事業を進めた。それに対して「事業計画の精度不足」と反省し、「具体的な細部計画の確認」が必要であったという意見もあった。

### 2【参加児童の対応】

このカテゴリは、〈参加児童の対応〉の1つのサブカテゴリであった。これは、エスコートキッズに参加した児童とのコミュニケーションに関する記述と解釈できるため【参加児童の対応】と命名した。

#### (1) 〈参加児童の対応〉

本事業でエスコートキッズに参加した児童は、200名を超える。学年は1年次から6年次までと幅広く、東海三県の複数のサッカーやフットサルスクールでプレイする児童があり、その児童に応じたコミュニケーションスキルが求められた。そのため、「子どものへの説明が伝わらない」や「スタッフ学生が参加児童の話が理解できない」、「参加児童の誘導が上手くできない」といった記述があった。一方、参加児童と打ち解けたことにより「意欲的な児童に助けられた」という意見もあった。

エスコートキッズという慣れない状況に緊張する児童に対して「効率的な休憩時間の設定」や集合時刻に遅れた「児童のフォロー」、「希望するチームのサイン会に参加できない児童」の即座の判断が求められる状況で対応が求められる場面で、それに即応できなかったことを顧みる項目もあった。

### 3【情報共有】

このカテゴリは、〈スタッフ間の情報共有〉、〈外部との密な連携〉、〈情報機器の活用〉の3つのサブカテゴリにより構成された。ここでは主に、参画した学生スタッフ同士の情報共有とFリーグや施設職員といった外部スタッフとの連携、そして情報共有手段とといった項目で構成されると解釈できるため【情報共有】と命名した。

#### (1) 〈スタッフ間の情報共有〉

この項目は最も多くの記述が認められ、改善すべき点の20.87%を占めた。スタッフ学生全体及び担当する「グループ内での情報が共有されていない」ため二度手間となり非効率であった。「メンバー間で相互理解できる引継ぎ」や「変更に応じた意思統一」といった情報の伝達不足に関する記述があった。個々人が担う「役割の明確化」や「役割の伝達・確認」が不足のため、全ての業務内容を全ての参画学生が理解できていない状況にあった。すなわち、途中で役割内容の変更が完全に伝達されなかったとの指摘があった。

ただし、この〈情報共有〉の課題は、試合が開催される3日間において、ことあるごとに学生責任者を中心に学生スタッフが自発的に集まり主体的に短時間で打ち合わせを繰り返し改善され、確実な相互理解を深め、情報伝達の漏れによるミスは確実に一つずつ解消した。

#### (2) 〈外部との密な連携〉

これは、Fリーグや試合会場となった施設の職員との連携を意味する。「外部組織（施設）との連携不足」では、特に、エスコートキッズやサイン会に参加する児童を誘導する際に、施設内の立ち入りが可能な範囲が分からなかったため、密な連携による情報共有が必要であったという記述であった。また、引率した「保護者の立ち入り可能な範囲」に関する規制の情報共有不足も認められた。

#### (3) 〈情報機器の活用〉

今回の集客事業を運営する上で、試合期間の情報交換は携帯電話でのSNSとランシーバーを使用した。「会場での活用法」や「管理シートを検討」してもよいのではないかという改善提案もあった。

### 4 【計画性】

このカテゴリは、〈事前準備〉、〈計画的な人員配置〉、〈アンケート調査〉、〈時間管理〉の4つのサブカテゴリにより構成された。試合当日までのタイムスケジュールと計画的な学生スタッフの役割配置の項目から構成されると解釈できるため【計画性】と命名した。

#### (1) 〈事前準備〉

試合期間の3日間は、Fリーグのディビジョン1（1部）に属するチームのチームオリジナル商品（グッズ）の販売を請け負った。しかし、「事業と役割の知識不足」のため、来場された観戦者に販売する際に質問されても即答できない事態が生じた。また、筆記用具などの「事前の準備物不足」があった。これらは計画性とシミュレーション不足を指摘する意見であった。

#### (2) 計画的な人員配置

スタッフ学生の間で「業務負担の偏りがある」や「リーダーの責任が過剰である」という意見や、時間帯によっては特定の役割において人員不足に陥る事態が生じ、それに対して「サポート体制」が確立されていなかった。そのため、役割の理解を統一するためにも、「参画学生を統一化させる」などの対策をとり、円滑に事業が運営できるようにすべきであったという改善策があった。一方、運営に当たる学生スタッフの絶対数が不足しており「人員不足」を指摘する意見もあった。

#### (3) 〈アンケート調査〉

試合期間を通してFリーグの試合観戦に関する市場を調査するため、アンケート調査が実施された。その回答率を上げるため、何らかの「回答することによる特典」を準備すべきであったという意見があった。

#### (4) 〈時間管理〉

中核となる参画学生は「試合当日までの業務内容とタイムスケジュール」及び「当日のタイムスケジュール」が把握できているが、試合当日のみの学生スタッフは「スケジュール」が確実に理解できておらず、不安を訴える学生もあった。また、試合中などの「空き時間を有効活用」すべきではないかという次回に向けての提案もあった。

### 5 【試合会場環境】

このカテゴリは、〈試合会場環境の理解〉のサブカテゴリにより構成された。ここでは主に、試合会場となった武田テバオーシャンアリーナの内部環境と試合のインターネット配信をするためのテレビカメラの配置に関する項目で構成されると解釈できるため【試合会場環境】と命名した。

#### (1) 〈試合会場環境の理解〉

試合当日を迎えるまでに学生スタッフは1回の下見を実施している。しかし、それでは不足

であり「会場案内が分かりづらい」や「会場が理解できていない」といった意見、「エスコートキッズやサイン会参加児童の集合場所」やその誘導の導線が理解できず困惑したという意見があった。

また、試合期間を通して全ての試合がインターネット配信され、そのため「テレビカメラが複数箇所に配置」されており、それに映らないよう会場全体に気を配る必要があった。インターネット配信があるとは事前に把握していたが「想定以上」の配慮が求められた。

## 6【個人的能力】

このカテゴリは、〈個人の能力〉のサブカテゴリにより構成された。ここでは主に、小さなミスにつながったスタッフ学生の能力に関する項目で構成されると解釈できるため【個人的能力】と命名した。

### (1) 〈個人の能力〉

ここでは「大きなミスはなかったが小さなミスがあった」とあり、その代表が「忘れ物」や「見落とし」である。その要因を記述する項目があり、「慣れ」や「疲労による怠惰」である。次いで、「素早い判断」が求められる場面での対応ができない、あるいは「途中で改善要求に対応できない」、「突発的なトラブルに迅速な対応ができない」といった経験不足による自己の改善点を記述する学生があった。また、事業に参画する一員としての自覚が不足していたと省みる記述もあった。すなわち、「人に頼りすぎた」や「人任せにしてしまった」とあった。加えて「体調管理」や「時間管理」に関する項目も認められた。

## 7【学生組織】

このカテゴリは、〈人間関係〉と〈リーダーの責任〉の2つのサブカテゴリにより構成された。ここでは事業に参画した学生間の人間関係とトラブル時の解決に関する事項とリーダーシップに関する項目で構成されると解釈できるため【学生組織】と命名した。

### (1) 〈人間関係〉

自発的な学生が集まった未熟な組織ならではの「組織内トラブルの早期解決ができない」やこの事業に参画した学生スタッフの間で「モチベーションに温度差がある」といった改善すべき課題が挙げられた。

### (2) 〈リーダーの責任〉

リーダーとして「スタッフの個性を理解する」、事業を進めるうえで内容に「変更が生じた場合に、スタッフ学生に理解させ、納得させて、行動させる」ことが求められる。「組織のリーダーは難しい」というリーダーとしての責任と組織運営の難しさを記述する学生があった。

## IV 考察

本研究の目的は、日本トップリーグ連携機構に加盟するFリーグの集客プロジェクト（事業）に参画した学生の学びの内容、特に改善を要すると感じた事項を検討することである。その背景には、スポーツ庁のスポーツ経営人材プラットフォーム協議会が「アカデミックな教育機関においてスポーツ界の現場の実態に触れる内容や講義が十分でなく、即戦力としてスポーツ界で活躍できる人材が育成できていない<sup>2)</sup>」という課題の指摘がある。この課題を解消するために岐阜協立大学はFリーグと連携協定を締結して独自のスポーツ経営人材を育成する教育システムを試行した。今回の分析は、独自の教育システムに改良を加えて再構築するための基礎的資料を得ることであった。

調査対象となった15名の参画学生の学び事項の総数は199件であった。それは、「できた・成果」、「全般的な学びの成果」そして「次回に向けて「改善すべき点」に大別でき、「改善すべき点」が最も多く115件あり、全コードの57.79%を占めた。そこで、本研究では「改善すべき点」に焦点化して検討を加えた。

本研究で得られた参画学生の最も多い記述内容は、〈スタッフ間の情報共有〉であり24件あ



た。これは、3日間の試合進行の合間に学生が自発的に集まり、主体的に解消したが、事業が開始された当初はいくつかの課題があったためであろう。この事業で中核として参画しているリーダーの学生達と試合期間のみの参加学生では、役割遂行に関する情報の理解度に差が生まれ、意思疎通ができていない場面があった。そのため、〈スタッフ間の情報共有〉を課題に挙げる学生が多く認められた。

本プロジェクトチームでは、情報共有を課題とするだけでなく、試合の合間に短時間でも話し合いの場をつくり、情報の相互理解に努め、試合進行やリーグ側、参加児童・保護者に迷惑が及ばないように常に最善策を見出そうと学生主体で試行錯誤して課題解消に努めた。それは「できた点・学びの成果」にて記述が認められた。この項目に関する検討は次の報告に譲るとする。

次いで多くの記述が認められたのは、〈計画的な人員配置〉で18件であった。プロスポーツチームと連携して事業をする他大学の事例の多くは「大学授業の一環」として事例が多い。本事業では参画した学生は研究会に属する有志学生であり、極めて少数の学生で3日間12試合でのエスコートキッズ及びサイン会の事業を運営しなければならなかった。そのため、この参画学生の少ない人数がこの記述内容と関連があると考えられる。

〈参加児童の対応〉が3つ目の課題として挙げられた。つまり、小学生児童とのコミュニケーションスキルを課題と考える学生が多くあった。小学生でも理解できる説明や行動を促す言葉遣い等がそれに該当する。例えば「テレビ配信があり、試合開始時刻の遅延は許されないため迅速で機敏な行動をしなければならない」や「エスコートキッズは、試合前の選手に話しかけられない」といったことを、その試合当日に初めて会った参加児童に分かる言葉で説明し、行動を促さなければならない。しかも、その参加児童が満足できる事業内容にしなければならない。そのため参加児童とのコミュニケーションスキルを課題とする学生が多く認められた。

## V 結論

本研究では、Fリーグと連携して実施した集客事業に参画した学生を対象に、活動を通しての学びの分析を試みた。本報では最も記述件数が多かった「次回の事業に向けて改善する点」に着目して記述内容を分析した。その結果、次のことが明らかとなった。

1. 学びの気づき項目数総数は、199件であった。
2. 参画学生の学びは「全般的な成果」、「できた点・成果」そして「改善する点」の3つに大別でき、「改善する点」は115件あり、57.79%を占めた。
3. 「改善する点」は、14つのサブカテゴリと7つのカテゴリに分分類できた。
4. サブカテゴリは、〈広報活動〉、〈企画立案・計画性〉、〈参加児童相合〉、〈スタッフ間の情報共有〉、〈外部との密な連携〉、〈情報機器の活用〉、〈事前準備〉、〈計画的な人員配置〉、〈アンケート調査〉、〈時間管理〉、〈試合会場環境の理解〉、〈個人の能力〉、〈人間関係〉、〈リーダーの責任〉の14つであった。
5. カテゴリは、【事前の活動】、【参加者対応】、【情報共有】、【計画性】、【試合会場環境】、【個人の能力】、【学生組織】の7つであった。
6. 参画学生の学びを分析した結果、スタッフ間の情報の共有と計画的な人員配置を課題に挙げる学生が多く認められた。

## 付記

本研究は、岐阜協立大学2019年度「学長裁量経費事業」の教育改革助成金を受けて実施した。また、貴重な実践的な学びの場を提供して頂くだけでなく、参画学生の指導にもご尽力いただいた一般財団法人日本フットサル連盟・日本フットサルリーグ（Fリーグ）の渡邊真人様には心から感謝申し上げます。

**【参考文献】**

- 1) 一般社団法人日本トップリーグ連携機構 (2020) 「参加  
トップリーグ」  
<http://japantopleague.jp/static/aboutus/league/>  
(最終アクセス 2020年12月23日)
- 2) スポーツ庁 (2016) スポーツ経営人材プラットフォーム  
協議会第1回議事要旨, 配布資料3,  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/011\\_  
index/gijiroku/1381068.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/011_index/gijiroku/1381068.htm)  
(2020年12月22日 最終アクセス)